

中学校社会科の授業でITの活用を加えた指導の報告 －2 学年「さまざまな面からとらえた日本」の実践を通して－

仙台市立秋保中学校 教諭 高橋 洋充

hiromiti@sendai-c.ed.jp

<http://www.sendai-c.ed.jp/~akiu-jhs/>

キーワード：中学校、2 学年、社会科、IT活用、普通教室

1 はじめに

ほとんどの生徒が学習内容を「分きたい」と願っているように、ほとんどの教員が、教科目標の達成のために「IT を活用してみたい」という気持ちを持っている。しかし、小学校に比べ、中学校では IT の活用が進んでいないという文部科学省の調査結果が出ている。その原因は、これまでの経験から次の3点が考えられる。

- ・普通教室での IT 機器の設置及び取り外しに、時間と手間がかかる。中学校では教師が教室を移動して授業をするために、校舎がバリアフリーの構造ではない場合、さらに活用へのハードルは高くなる。
- ・中学校は教科担任制であり、担当している学級が平等にコンピュータ室で学習するための割当の確保が難しい。
- ・IT 機器を活用した授業の効果を実感できない。過去に IT を活用した授業で失敗した体験があれば、さらに活用へのハードルは高くなる。

このような現状の中、全国の普通教室にコンピュータが整備されており、学校における IT の活用は「ふつうの教員がふつうの授業でふつうに使う」段階に入った。授業における IT の活用は、私の場合、コンピュータ室で行うことが多かったが、今回は普通教室での実践を報告する。(写真1は、コンピュータ室でタブレットに日本地図を描く生徒。写真2は、画像転送ソフトにより、タブレットに描かれた日本地図を見ている生徒。タブレットは、電子情報ボード的に使うことが多く、最近では使用頻度が高い。)



写真1 タブレットの使用



写真2 転送された地図

2 普通教室でのITの活用

昨年度まで、普通教室で使用する IT 機器は主に電子情報ボードであった。(写真3)それは電子情報ボードに「生徒の集中力の向上」の効果を感じたからである。清水康敬氏の論文に「人間の視覚の研究によれば、人は視線を移動させながら認識する。また、人の眼の視力は注視した場合の視力に対して、わずか5度もずれば視力は1/5 程度になってしまう。例えば視力が1.0 の人でも、注視点から5度ずれると、視力は0.2 以下となる。」(清水康敬 2004)とあり、電子情報ボードを積極的に使用する意味を見いだしたからである。実際に使用した後の電子情報ボードに対する生徒へのアンケートでは、準備の時間がかかることに生徒の不満が見られたが、「先生の指示している場所が一目で分かる」等の指導者の意図した回答も見られた。ただし、教室を移動して授業を行うためには、移動と準備の工夫が必要となり、簡易ではあるが自作のプロジェクター設置台を作成した。(写真4)



写真3 電子情報ボード

今年度になり、準備の簡単のため画像転送ソフトとタブレットを電子情報ボードの代わりに使用していたが、生徒から「先生の手元を見て学習を進めるとわかりやすいが、画面だけを見ていると授業に集中できない」との言葉があり、使用方法を見直した。

現在では、IT 機器に頼りすぎていた指導を反省し、必要な場面で必要な機器を限定して使うように心がけている。これまでの指導を IT 機器に変えるのではなく、これまでの指導に IT 機器を加える感覚である。

このような IT 機器の活用を心がけることにより、黒板やペーパー資料、ワークシートやノートなどを組み合わせた従来の指導と IT 機器が組み合わせられ、相乗効果が期待されるようになった。「ふつうの教員がふつうの教室



写真4 IT 機器活用セット

で普通に使う」の意味を自分なりに理解したように思う。

3 授業の概要

中学校 2年社会科（地理的分野）

「日本の自然環境（自然環境から見た日本の地域的特色）」

(1) 小单元について

本小单元は、学習指導要領の（3）「世界と比べてみた日本」の（ア）の「様々な面からとらえた日本」に基づいて設定されたものである。世界的視野から日本を一つの地域として追究することによって、また、日本全体の視野から大まかな国内の地域差を追究することによって、我が国の国土の特色をとらえさせるとともに、地域間を比較し関連付けて地域的特色を明らかにする視点や方法を身につけることを主なねらいとしている。

(2) 本時の目標

温帯の気候は、海流と偏西風が影響していることに気付くようにする。

(3) 本時の流れ

- ① 気候帯について振り返る。
- ② 温帯の特色について話し合う。
- ③ 学習課題を設定する。

「ヨーロッパは日本よりも高緯度にあるのに、日本と同じ温帯が分布しているのはなぜだろう。」

- ④ 海流と偏西風に着目して、学習課題を解決する。
- ⑤ 日本の気候にも海流と風が影響していることに気づく。

(4) 授業の実際

学習問題を設定し、集団で考えを練り上げていく場合には、コンピュータ室ではなく普通教室がよい。それは、生徒と正対するため、生徒の表情を含めた反応を見ながら授業を進めることができるためである。（写真5）

本時では、温帯についての学習問題を設定する。そのため、事前に気候帯についてワークシートでまとめる作業を行った。（図1）このワークシートから温帯だけを抜き出した資料（図2）をプロジェクターで投影し、学習問題を設定するとともに、問題について話し合った。（写真6）

授業では、マグネットスクリーンを取り外し、黒板に地図を書いて話し合ったり、温帯の資料を投影し、その地図にタブレットで書き込みをしたりしながら話し合いを深めていった。授業の最後に、自作の教材を見せた。本校の理科担当の大枝教諭が撮影し、高橋がデジタルコンテンツ化したものである。本校の校庭から雲の動きをコマ送りで撮影し、短時間で雲の動きを理解することができるものである。（写真7）この教材を視聴することにより、温帯における風の動きを実感することができるとともに、次時のねらいである日本の気候区分についての学習にも意識付けをすることができた。

4 授業実践のまとめ

授業後の検討会では、IT機器の活用方法ではなく、発問や生徒の反応、また、生徒の反応に対する指導者の対応についての話し合いが中心であった。IT機器は、生徒の発言を即座にスクリーン上の資料に反映したり、視点を集中させたりするのは便利であるが、その発言を引き出すのは、あくまでも前時までの指導であり、IT機器は手助けをしたにすぎない。今回の授業では、事前に生徒自身が作業したワークシートの積み重ねが発言を引き出した。「ふつうの教員がふつうの教室でふつうに使う」の「ふつう」の意味が実践を通して深くなったことは私自身の収穫だった。今後は、生徒がIT機器を「ふつう」に活用する場面を意図的に設定しながら、教科の目標達成と情報活用能力の育成をバランスよく計画した実践に取り組んでいきたい。

【参考文献等】 清水 康敬「電子情報ボードの活用の現状と課題」<http://www.cec.or.jp/Ekokuban2004/shimizu.pdf>



写真5 普通教室



図1 生徒作成のワークシート



図2 温帯の資料

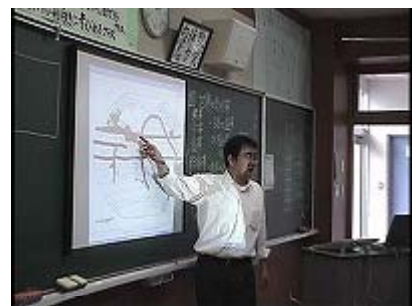


写真6 話し合いの様子



写真7 自作資料（雲の動き）